（別紙２）

論文審査の結果の要旨

氏名　山本　潤

本論文は、ゲルマン口頭伝承・口承文芸の素材を初めて書記文芸として造形したと考えられ、ドイツ文学史上独自の地位を占める『ニーベルンゲンの歌』（1200 年前後）と、初期写本に例外なく併録され同作と伝承上一種の複合体を形成している『（ニーベルンゲン）哀歌』（同）とを対象とし、〈記憶〉をキーワードに、口承から書記すなわち口頭から文書へというメディアの転換、同時代の宮廷文化への古来の英雄伝承の導入、集団的記憶としての口頭伝承と文書に基づく歴史記述との関係、等の相互に関連する諸観点から、また代表的写本間の差異に注目しつつ、考察したものである。『ニーベルンゲンの歌』は、18 世紀に再発見されて以来、『イーリアス』にも比すべき民族叙事詩として位置づけられるなど、常に注目を集めてきた。一方、それへの解釈、続編、原典仮構などの性格を持つ『哀歌』は、平板とも見える内容から、注目されることが少なかったが、1980 年代以降、『ニーベルンゲンの歌』と共に考察されるべきものであるとの認識が深まる。その後の研究は、J.Bumke による『哀歌』写本研究（1996）と画期的新エディション（1999）、および J.-D. Müller による『ニーベルンゲンの歌』の総合的解釈（1998）によって新段階に入ったと言え、本論文はこの研究状況を的確に踏まえたものと言える。

第 1 章は、まず、『ニーベルンゲンの歌』が、素材のみならず有節形式や定型的語法の多用などによって口承文芸との連続性を打ち出していることを確認した上で、初期写本間の冒頭部の相違を分析する。すぐに物語を始める古形が口承文芸冒頭部の継承・模倣と考えられるのに対し、後に付加された冒頭詩節は、物語に先立つ「聴き手」への呼びかけであり、詩人が語り出す場をシミュレートする。そこで用いられる「古譚」という語とともに、この序言は明らかに書記文芸のものであり、口承文芸の書記文芸化という事態をめぐる問題が既に伝承の最初期において反省対象となっていたことを端的に示すものだとする解釈は、十分妥当性を持つ。続いて分析されるのは、口承素材を書記文芸化する際ひとつの焦点となったと考えられる、英雄シーフリト像である。物語の要所要所の解釈によって、集団的記憶・集団的知識としての口頭伝承に遡ると考えられる英雄像と、本作品が新たに造形したと目される宮廷的騎士像とが、緊張を孕みつつ重層的に本作品のシーフリト像を成し、筋の進行を担っているとする分析も、説得力のあるものである。

第 2 章は、3 グループに分類される伝承を各々代表する最古の 3 写本における両作品の収録方法を、その移行部分を中心に詳しく分析することによって、「複合体」としての伝承の実態を検証する。示されるのは、詩行形式も語りの姿勢もまったく異なる両者に、視覚上、また特に一写本においては章構成上も、出来る限り統一性を与える、写本制作者ないし校訂者達の工夫であり、この分析結果は、今日から見れば全く異質な両作品が、中世における伝承にあっては強固な一体性を持っていた、とする推定を強化する。

第 3 章は、それを踏まえて『哀歌』を分析する。『ニーベルンゲンの歌』の内容に対する解釈と言える、因果関係の確定、人物評価、事の顛末の各宮廷への報告とそれを受けて行なわれる世代交代による現実主義的な再出発、さらには、パッサウ司教の宮廷で編纂されたラテン語による記録が全伝承の原典となったとする仮構は、文字文化の主な担い手であったキリスト教会およびその影響下にあった宮廷文化の立場を示すが、それが〈記憶〉の発生、伝承、その真実性の保証を問題としているのであり、『哀歌』は、口承英雄文学と書記文芸の狭間に位置する『ニーベルンゲンの歌』をより深く文字文化に取り込む枠組を提供することによって、その書記文芸としての受容・伝承を可能にしたのだ、という本論文の主張は、十分に検討に値するものである。

本論文は、一視角に集中することによる論点の限定に憾みを残すものの、詳細なテクスト解釈によって〈記憶〉の問題を軸に両作品に一貫した解釈を示した力量は十分評価すべきものである。以上に鑑みて、本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に相当するものと判断する。